

「ShapeShifter」

舞台上、後ろに並ぶ9人分の箱。

開場時から、舞台上では9人が遊んでいる。ジェンガ、人狼など。

MO:66db(freetempo remix)

曲上がっていく、後ろに9人並ぶ。座る人と、立つ人。

セミの音クロス。

1が前に出て、手を叩いている。2が前に出てきて。

2「お待たせー」

1、動き止まる。手のひらを見せる。

2「うわあー、手が蝉だらけだ！！」

1「はっはっはっはっは、おいおい、よく見てみろよ」

2「……よく見ても蝉だ！！」

1、また叩き始める。2止める。

すごく力強く叩き続ける1。

2「すごい、ものすごい力だ。何が君をそこまで」

1「俺、昔、親を、蜂に殺されているんだ」

2「蝉関係ないじゃないか」

1がまた叩こうとする。2止める。

2「よし、逃げろ！！逃げろー」

3出てくる。

3「あの」

1「なんでしょう、私はセミを殺すのに忙しいんです」

3「今、助けていただいたセミです。恩を返しにきました」

2「早くないですか」

3「寿命が短いので、全て善は急げなのです」

2「まあいいや、何をしてくれるんですか」

3「あ、もう時間です」

2「早い！！」

3死ぬ。

2「死んだ」

1「セミは死ぬのが早い」

2「そうさ、セミは死ぬのが早いさ。なのに、お前はセミを殺す。

本来ならば、蜂を殺さねばならぬ理由でセミを殺す」

1「セミは死ぬのが早い。セミは地上に出てきて、7日間で死ぬ

だから殺しているのさ。夏のセミは皆、末期ガンなのだ。

俺は彼らを苦しませるまいとして、殺しているのだ。

いわば、夏の安楽死請負人なのだ」

2「短いからこそ、短いからこそ、短いからこそ！！」

1「俺もなのだ」

2「ん？」

1「俺も、この夏いっぱいしか生きられないのだ」

2「え？」

1「言われたんだよ、君はこの夏の終わりに死ぬのだと。

しかし、誰も俺を殺してはくれない。俺は苦しい。ゴールが見えてしまった時、どんなに全力で走ろうとも、人間の筋肉は力を抜くのだ。

そう、その時に、襲われるあの、感覚。それが安堵なのだよ」

2「だったら、尚更だ。お前の命に限りがあるのなら、その有効な時間を

セミを殺すことなんかには使わんじゃない！」

1「ひと夏にセミを殺した世界記録は2万3254匹だという」

2「お前まさか」

1「その記録まで、あと、2万3000匹なのだ」

2「もうすぐで届くのかと思ったら全然足りてないじゃないか！！」

1「これからは1匹潰すごとに2匹カウントするというルールでやっていこうと

思っているんだ」

2「なんて勝手なルールだ」

1「さあ、覚悟したまえ蟬諸君！！今から俺が君たちの短い夏を終わらせよう！！

今のうちに泣いて喚くのだ！！好きな子に告白していないなら、

今のうちに告白するのだ、夏は告白の成功率が大幅アップ！！」

4、5、6が出てくる、3はよきタイミングで戻る。

4「夏に、水を蛇口から直で飲む女の鎖骨はえぐいほどエロい！！」

2「君たち誰だ！増えるな！」

5「私の統計によりますと、夏に麦わら帽子と白いワンピース、  
お花のようなものをあしらったサンダル、そんな感じのコーディネートを  
決め込んでいる女は、ヤリマン！！超ヤリマン！！」

2「決めつけるな、やめるんだ！！」

6「夏の女は足が早い！」

2「君、すごく雑！！」

7が出てきて、叫ぶ。

ME 夏のお嬢さん

7「大変だ、この街に夏のお嬢さんがやってくるぞ」

1456「え？郁恵ちゃんが！？」

7「郁恵ちゃんじゃない！！夏のお嬢さんだ！！」

SE ボカーン、みんな吹き飛ぶ。

1456「うわー、何かが爆発した！！」

8出てくる。

8「こんにちは、夏のお嬢さんこと、秋冬子です」

2「名前変えろ！！」

8「さあ、夏のお嬢さんに懺悔なさい！！(アクエリアスをいやらしく飲む)」

2「アクエリアスをいやしく飲んだ！！」

1456「さすが夏のお嬢さん」

8「中身はポカリよ！！」

2「どうでもいい！！」

9NA「この時、地球の裏側では物凄い戦争が起こっていた」

8「さあ、懺悔をしなさい、男子たち、夏の懺悔が無いなんて言わせないわよ」

1「僕は、この夏、たくさんのセミを殺しています」

8「申し開きな！！」

1「しかし、土から出たセミはもれなく末期ガンでございます。なので、

俺はセミを早々に天国へ送り届ける役割を買ってでたのです。

落ち込んだりもしたけれど、私は、元気です」

8「セミのかたきー！！」

夏のお嬢さんが、手を打ち鳴らす。

4「その瞬間、全長5mの夏のお嬢さんの手が」

5「ものすごいスピードで、セミ殺し男を挟み込み」

6「パンっという衝撃音と共に、男は倒れた」

1くにやっとなって倒れる。

45678戻る。

別れの歌的なクラシック。

2「おい、お前ー！！」

1「ははは、俺にふさわしい最後だと思わないか」

2「お前に相応しい最後だ」

1「ああ、耳に入ってくる音は、セミの大合唱と、風の揺れる音、

雲の流れるあの音さえも」

2「これに名前をつけるなら、お前ならどうする？」

1「俺は、今なら全身全霊で、この空気に名前を付けることができるだろう」

2「聞かせてくれ、お前は、これになんと名付けた？」

1「……夏」

2「うん！！」

ME:

3と7が走ってきて。入れ違いで1と2は戻る。

3「イエーイ！！」

7「イエーイ！！」

8「ちょっと2人とも宿題はやったの？」

3「うるせーババア！！宿題なんてやらなくていいんだよ」

7「おい、お母さんにそんな事言っているのかよ」  
3「俺よ、世界で文句言える人、お母さんしかいねえんだ」  
7「俺も」  
3「ナイス内弁慶コンビ！！」  
7「ゲームやろうぜ！！」  
3「いいぜ、やっぱりオレらと言えばファミコンよなあ」  
7「でもファミコンと言えば高橋名人よな」  
3「俺、ファミコンに絶賛片思い中づら」

2人座る。

ファミコンの電源入った音。

3「タイガークエスト、あとはラスボスを倒すのみ」  
7「いざ、魔王を倒す戦いへ！！」

12345678がうじゃうじゃと下手にいる。上手に9

8人と1人に別れる。1人の方は、魔王。

魔王「多くない？」

8人ヒソヒソと相談。

勇者「何がですか」

魔王「いや、ちょっと、・・・7・・・8・・・やっぱ8人いるよね」

勇者「はい」

魔王「多くない？」

勇者「多い？多っていうのは」

魔王「うん、勇者だよな」

勇者「はい、勇者です」

まほ「魔法使いです」

格闘「格闘家です」

賢者「賢者です」

忍者「忍者です」

魔王「うん、多いよね」

勇者「多い？」

魔王「いや、うん、あれでしょ？倒しに来たんでしょ？私を」  
勇者「覚悟！！」  
魔王「多いんだよね」  
勇者「多い？」  
魔王「まあいいや、ちょっと残りのメンバーはなんなの？」  
のこ「魔法使い！！」  
魔王「ほら、もう、こっからかぶちゃってる、次の子は？」  
ゆう「勇者！！」  
魔王「ほら、変なことになった。え？さっきのお前は？」  
勇者「勇者！！」  
魔王「ほらほらほら、すげー大事な部分かぶってるじゃん」  
コー「あのお、魔王さん、戦っていただけないんでしょうか」  
魔王「誰、君は誰よ」  
コー「彼らのコーチですけど」  
魔王「ほら、変なのいる。あのね、今まで、歴代挑んできたパーティーは、  
4人が基本なのね。何人いるよ君ら」  
勇者「8人で来たんですけど」  
魔王「多いよ」  
コー「じゃあ、この辺から後ろは見てますから、で、この4人で戦うんで」  
魔王「あ、そう？」  
コー「で、ダメだったら、こっちもいきますんで」  
魔王「だったら多いなあ。え？すごい弱いのか？すごい弱いからそんなにいるの？」  
まほ「大体、僕と彼(勇者)で倒してきました」  
魔王「めっちゃ強いじゃん、え？その時後ろの人たちは何してんの？」  
忍者「石を投げたり」  
格闘「悪口を言ったり」  
魔王「嫌な事するなあ」  
コー「身も心もズタズタにが僕らの信条なんです」  
魔王「戦わないよ」  
8人「えー？」  
魔王「怖いし、多いし」  
勇者「え？でもクリアしたいんですけど」  
魔王「クリアでいいよ、負けでいいよ俺」  
コー「それだとちょっと・・・なあ」  
魔王「だったら、だから、減らしてきてって、8人はちょっと多いから」

8人ひそひそする。

何人が「やっちゃおうよ」みたいなこと言ってる。

魔王「ちょちょちょ」

コー「はい？」

魔王「今、やっちゃおうって言ったやつちよつと来て」

忍者が行く、魔王にたたかれる。

魔王「戻っていいよ」

忍者戻る。「なんか叩かれた」とか言ってる。

コー「あの、魔王さん、じゃあ、あの2人ほど、とりあえず帰るっていう感じで」

魔王「誰と誰が帰るの？」

忍者と格闘家が前に

魔王「君ら帰るの」

忍者「子供が生まれそうなので」

格闘「親が死にそうなので」

魔王「帰れ！！一刻もはやく帰れ！！君らこのパーティーにいないから。

多いんだから。基本的に。」

忍者(3)と格闘家(7)。戻る。勇者携帯でメールを見る。

魔王「本当はあと2人ぐらい帰って欲しいんだけどね」

勇者「あのお」

魔王「なによ」

勇者「友達が来たいっていつてんですけど」

魔王「だから増やしてどうすんのよ、多いつてんのに」

勇者「100人なんですけど」

魔王「絶対ダメだよ、友達多いな君」

のこ「写メいいですか？」

魔王「写メはいいよ。」

のこ写メ撮る。

魔王「うん、だからね、一旦帰って、また話し合っ、4人にしぼって来て。

その写メ撮った子とかはもう、観光入っちゃってるからね」

のこ「twitter にあげても大丈夫ですか？」

魔王「いいよ、いいんだけどね。ちょっとコーチの子さ」

コー「はい」

魔王「君が一旦まとめて、で、4人に決めてきて、そしたら戦うから」

6人ひそひそする。

コー「明日の3時大丈夫ですか？」

魔王「ちょっと待って、……午後ね？」

コー「はい、午後です」

魔王「えーっと、駅からここが20分だから、あそこで用事が、終わって、

飯は、食う時間ないけど、まあじゃあ、3時半で」

コー「じゃあ3時半で」

のこ「3時半って twitter にあげてもいいですか？」

魔王「それは、ちょっと来ちゃうかもしれないから、内緒で、君たちの内から

4人来てくれればいいから」

勇者「あの」

魔王「何よ」

勇者「帰り道なんですけど……」

魔王「わかんなくなっちゃったの？ここまーっすぐ行ったら、ファミマ見えるから、

そこ超えたら右にこう、道がカーブしてるから、そっちずーっと行ったら

駅だから」

勇者「あ、あのアップルストアの前の」

魔王「そーそー、アップルストアあって、斜め向かえに TSUTAYA ある通り」

勇者「あ、わかりました。ありがとうございます」

まほ「あの、北洋銀行ってこの辺は……」

魔王「北洋銀行は駅の向こう側にあるから、駅の中抜けて、こっち側は北口で、

向こう南口だから。で南口から出たらすぐ看板あるから。武富士の看板と

並んでるから」

まほ「見たらわかります？」

魔王「見たらすぐわかるから」

まほ「ありがとうございます」



コー「それじゃあ明日3時半に」

魔王「あ、みんなそっち行くの？じゃあ途中まで俺一緒だから、2つ目の信号まで道一緒だわ」

7人で元に戻る。すれ違いで、3と7出てきて、最初のゲームの配置に。

3「あー！！また倒せなかったよ！！」

7「魔王超強えーよ」

ゲームをしている。ゲーム音。音楽に。

3と7立ち上がって。フォーメーションで、カメラを渡して。

それぞれ、袖に向かって写真を撮る。これの繰り返しOPになる。

OP あけて

斎藤と高山が熊谷に連れられて入ってくる。作業をしている。谷村と芳賀。

熊谷「みなさん、こんにちは」

斎藤・高山「こんにちは」

熊谷「今日は、夏休み子供企画としまして、工場の見学をしてもらいます」

斎藤「やったー！工場だ！」

熊谷「観てください、お兄さんたちが作業をしていますよ」

高山「本当だ！作業だ！！」

熊谷「みんな、工場は好きかな？」

斎藤「好きです」

高山「(何かを指さして)ベルトコンベアーです」

熊谷「うん」

困った顔をしている。谷村と芳賀。

熊谷「それじゃあみんなの疑問を工場の人にぶつけてみようか」

高山「今年は自殺率が高いそうですが、どう思いますか？」

斎藤「女性は30代が一番エロいって本当ですか？」

熊谷「ん～工場の方はそういうのわかるかな？」

高山「わー！！」

齋藤「わー！！」

高山、齋藤、戻る。

熊谷「こらこらー！！あんまり走り回るなよ！！危ない機械や危ない大人がたくさん  
いるからね」

谷村「困ったなあ」

熊谷「どうしました？」

芳賀「いやね、さっき岡田さんがね」

熊谷「誰ですかそれは」

芳賀「パートのおっさんなんだけどね」

熊谷「はあ」

芳賀「このベルトコンベアーに流れて行って戻ってこないんだよ」

熊谷「えー？大丈夫なんですか？」

谷村「このベルトコンベアー、あっちにいくと、裁断機なんだよね」

高山、齋藤戻ってくる。

高山「わー！！死体だー！！」

齋藤「うええええええええええ！！」

谷村「ああ、やっぱり死んでたかあ」

芳賀「じゃあ作業に戻りましょう」

谷村、芳賀作業に戻る

熊谷「淡白だな！！」

高山「この腕もらっていいですか」

熊谷「こら！腕を持ってくるんじゃない！！」

高山、腕をベルトコンベアーに流す。

熊谷「ベルトコンベアーに流すんじゃない」

谷村、芳賀、それを指差し確認する。

熊谷「なんの確認だそれは！」

斎藤、その腕を取る。

熊谷「取るんじゃない！！」

斎藤、高山剣道をはじめめる。

斎藤高山「やー！！」

熊谷「岡田さんの腕で遊ぶんじゃない！！」

木村入ってくる。

木村「あのお」

谷村「はい」

木村「岡田の妻ですが」

芳賀「ああ、岡田さんの」

木村「主人がお弁当を忘れたので届けに来たんですけど」

谷村「あなたの旦那さんは亡くなりました」

木村「え？」

熊谷「はあっ！すごく嫌な現場に遭遇してしまった」

高山、斎藤、何かをメモっている。

熊谷「子供たちは、何かを書き留めているようだが」

木村「そうですか……私は、主人と結婚するときに、こんな約束をしました。

あなたがお弁当を忘れたら、どんな手を使ってでも届けに行くと」

熊谷「嫌な予感がする」

ME

木村「子供たち、よく見ておきなさい。愛は恐怖に屈しないという事を、

この夏に学びなさい！！」

谷村「奥さんあんた」

木村「そうさ、この弁当！！冥土まで届けてやろうってのさ！！」

芳賀「奥さん、ベルトコンベアーの操縦は俺に任せな！！冥土への快適な旅をお約束するぜ！！」

木村「任せたわよ！エースパイロット！！」

木村、谷村、芳賀敬礼！！

木村「そのあんた」

熊谷「はい！！」

木村「あんた、いい男だね。私好みの男さ。もっと早く出会っていたら、

あんたと結婚して、3人ほどの子供を作っただろう、でも！

私には岡田がいるの。ごめんなさいね」

熊谷「苗字で呼んでいるのか」

木村「覚悟を決めたからかしら、岡田との思い出が、今、曖昧な形で蘇るわ！！」

堀内と将人出る。

堀内将人「おーいお前ー！！」

木村「あー、どっちかが岡田、どっちかが岡田！！」

熊谷「本当に曖昧だ」

木村「さあ、どこの誰の子かもわからない子供たち！！私に、最後のひと押しを！！

子供ながらの、その無垢で純粋な唇から、私に最後の力を頂戴！！」

斎藤「おっばい」

高山「ちんこ」

木村「う、うおおおおおおおおおお！！」

熊谷「無理やり行った！！」

木村走り去る。

みんな手を振る。

高山前に入る。

高山「こうして、僕はベルトコンベアーを見るたびに、少しだけ嫌な気分になるという

トラウマを得たのでした」

川尻出てくる。

川尻「はい子供たち、紙芝居だよ」

堀内「おじさん紙芝居ってなあに」

川尻「ちらっと見るけど無視）さあ、よってらっしゃい見てらっしゃい。

おじさんの紙芝居はじまるよ」

将人「おじさん、今日はどんなお話をするの？」

川尻「(見るけど無視)ではお話を始めるよー。あるところにこういうのと、  
こういうのがいました。こっちのこの辺が変なふうになっちゃってる方は、  
なんかすごく疲れることをしていました。そして、この辺が変なふうにな  
っちゃってる方は、へんな事をしていました。そこに、なんか水の多いところ  
辺に、なんかこんな感じの変なやつが、流れてきて、それをみた、  
こんなかんじのやつが、なんかすごくそれっぽい事を言って、なんか、  
その変な奴を、へんなところに挟んで、汚い家に帰りました。  
その桃から生まれたのが、桃太郎です。鬼を倒しました。おわり」

子供たち拍手。

川尻「はい、今から粉を配るからねー、お父さんとお母さんの  
ご飯に混ぜるんだよー。ばれないように混ぜるんだよー」

子供たち嬉しそうにもらっては戻っていく。

谷村「ちゃんと弱ってきてるよー」

川尻「良かったねー、でも油断は禁物だよー。大人はしぶといからねー」

谷村「うん、ぬかりなくやるよ」

川尻「毎度ありー」

川尻以外みんな座る。

川尻「夏は復讐の季節です。誰が言ったわけでもありません。

たまたま、私の復讐劇の舞台が夏ただけです。

夏にね、愛犬のチワワをあんな風にされた時から夏はね、

そういう季節なんですよ。

人間生きていけば、春夏秋冬にテーマが出来てくるのです。

私の場合、春はパンティーの季節。夏は復讐の季節。

秋はパンティーの季節。冬はパンティーの季節です」

船の音:ぶおー

川尻「あっはっはっは、冬は嘘ですよ。冬は、冬はね」

川尻戻る。

高山、堀内、将人が出てきて。

高山「船が鳴いてやがるわあー！！」

堀内「よーし、上げるぞー！！上げ係の人ー！！」

将人「任せんさい！！うおおおおおお！！」

あ、ちょっと手伝ってもらっていいですか？」

3人「うおおおおおお！！」

堀内「網が水からドバァー————！！」

高山「大漁だ————い！！」

SE セミの鳴き声

将人「蝉だー！！セミが大量に網にかかってやがるぞー！！」

3人「格好いいー！！」

芳賀が手をたたきながら出てくる。

芳賀「2万3453……2万3454……こんにちは、

セミの殺し屋、秋冬子です」

堀内「名前変えろ！！」

芳賀「そのセミ譲ってもらえませんか？」

高山「それはできねー相談だな。海からこんなにセミが上がってくることは、

そうそうねえ」

高山、芳賀にボディブローを食らう。

高山「ぐふう」

高山倒れる。

将人「この乱暴者めー！！死ねー！！」

将人銃を乱射する。

芳賀全部交わす。

堀内「凄い、全ての弾をよけている。これがプロのセミ殺し屋の力なのか」

将人「く、くそう」

芳賀「はっはっはっは、これでも俺はひと夏の間にもセミを殺す数においては、  
世界記録ホルダー。お前らのように虫も殺さぬような顔をしたやつには  
負けぬのだ。いや、一人だけいたなあ。俺の対抗馬になるような男が、  
なんとやったかなあ」

将人「それは、俺の親父だ！！」

芳賀「それは奇遇だな。オヤジさんは元気かね」

将人「オヤジは死にました」

SE ガーン

芳賀「おやじさんが？」

将人「夏のお嬢さんにやられたんです」

SE ガーン

芳賀「夏のお嬢さんに！？」

将人「はい、手で挟まれて」

SE ガーン

芳賀「手で挟まれて！？」

将人「死にました」

SE ガーン

堀内「いいよもう！！」

芳賀「私のように、体を鍛えていればそんな事にはならなかっただろうに」

芳賀死ぬ。

堀内「しんだー！！よく見たら、さっきの銃弾、全部食らっている！！」

将人「親父ー！！敵はとったぞー！！」

堀内「よ、よく考えたら敵じゃない！！」

将人「なあお前、あの網に入っているセミ。どれぐらいいると思う」

堀内「まあざっと3万ぐらいだろうな」

将人「という事はだ、あのあみの中のセミを全て殺すことができれば、

俺が世界記録保持者になるというわけだな」

堀内「その通りだ」

将人「ようやく俺の時代がやってきたぞ！！とう！！（網に飛びうつるゼスチャー）」

堀内「おい！網に飛びうつってどうするつもりだ！！」

将人「今からこの全てのセミを殺す！！」

堀内「なぜだ！なぜお前の一族はセミを殺す」

将人「俺の祖父母は、蜂に殺されているんだ！！」

堀内「蜂を殺せ！！」

将人「なぜだろうな、セミは夏の神様だと聞いたことがあるだろう」

堀内「聞いたことない」

将人「俺はもしかしたら夏を殺そうとしているのかもしれない」

堀内「夏を殺したらどうなるんだ」

将人「秋と冬が来るのさ！！」

斎藤が走ってきて

斎藤「夏のお嬢さんが来たぞー！！」

高山と芳賀起き上がり、そこに熊谷が加わり。

高山芳賀熊谷「ええ？郁恵ちゃんが！？」

斎藤「郁恵ちゃんじゃない！夏の！お嬢さんだ！！」

SE ボカーン

将人以外みんな吹き飛ぶ

みんな「うわー、なんか爆発した」

ME 夏のお嬢さん

木村出てくる。

木村「こんにちは、夏のお嬢さんこと秋冬子です」



堀内「さっきのやつと同じ名前だ！」

木村「(エロい手つきで寿司を握る)おまちー」

堀内「エロい手つきで寿司を握った！！」

川尻 NA「その頃、マダガスカルでは動物たちが絶滅の危機を迎えていた」

将人「やっと会えたなオヤジのかたき！！」

木村「セミのかたきー！！」

堀内「この光景見たことあるかもしれない！！」

スローで、潰されていく将人

熊谷「その時、全長5mの夏のお嬢さんが、3万匹のセミごと」

高山「セミ殺し息子のせがれを挟み込み」

芳賀「そして、パンという衝撃音と共に男は倒れた！！」

木村、堀内に手のひらを見せる。

堀内「うわあー！！セミだらけ！！」

木村、客に手のひらを向ける。みんな戻る。

木村「土から出たセミの寿命は7日間。30000匹のセミを潰したとして、  
総合すると、575年分の命。それからとれたのが、約100リットルの  
よくわからない汁。私は、その汁を残らず飲み干し、下痢をした」

木村戻り、川尻(魔王)と熊谷が前に出てきて。

川尻「え？一人できたの？」

熊谷「はい」

川尻「少なくない？」

熊谷「え、でも多たって言ってたんで」

川尻「うん、いや、だから4人なのよ基本は」

熊谷「え？4人じゃなきゃダメなんですか？」

川尻「そんな感じで言ってたと思うんだけど」

熊谷「あんまりはつきり言われてなかったんで」

川尻「4人で来て欲しいな」

熊谷「4人ですね？はっきり言ってください、4人がいいってことですね？」

川尻「うん、4人」

熊谷「あんまり、曖昧な感じで言われると、今日みたいな事になるんで」

川尻「え？俺が悪い感じ？」

熊谷「こっちも、他の用事とかずらしてきてる訳ですから」

川尻「だって昨日さ」

熊谷「だから、言った言わないは今言ってもしょうがないですから、

そっちが言ったって言っても、こっちは聞いてないわけですから、

そういうのはやめましょうよ」

川尻「なんか、怒られてる感じがわかんないんだけど」

熊谷「じゃあ明日4人で倒しにきますから」

川尻「うん」

熊谷戻る、芳賀と谷本出てくる。ゲームしてる体制。

川尻「明日か……明日合コンなのに」

川尻もどる。

芳賀「魔王超可哀想！！」

谷村「でも超つえーよ魔王、おかあさーん！！おかあさーん！！おやつはー！？」

芳賀「あ、さっきお前がトイレ行ったときなんか言っていったよ」

谷村「え？どっか行ったの？」

芳賀「なんかお父さんがお弁当忘れたから工場に届けに行くってさ」

谷村「あっそ」

芳賀「でもいいよなあ」

谷村「何が？」

芳賀「俺の家、共働きだからお母さん家にいないんだよねえ」

谷村「いいじゃん自由で、俺、別に親いなくていいもん」

芳賀「まじで一」

谷村「俺、親とか消えてなくなればいいと思ってる派だから」

芳賀「まじかよ」

谷村「まじで」

芳賀「まじかよ」

谷村「まじだって」

芳賀「死んだよ」

谷村「え？」

芳賀「お前の母さん死んだよ」

谷村「……やったー！」

芳賀「おー、超強い、超動じねー」

SE 写真を撮る音

堀内、将人、高山、木村が写真を撮るような感じで出てくる。

その先に斎藤が出てくる。谷村、芳賀は戻る。

堀内「缶詰に人肉がまぎれていた問題についてですが」

将人「説明をお願いします」

斎藤「えー、この度、我社の缶詰に人肉が紛れ込んでいたという問題について  
ですが、本当に、しゃーしゃーせんつした！！」

高山「しゃー？」

木村「今のは謝罪でしょうか？」

斎藤「はい、もう本当に、消費者のみなさまには、本当にですね、  
ご迷惑をおかけしました。本当にしゃーしゃーせんつした」

堀内「しゃー……」

木村「しゃーっていう」

高山「工場内で起こった事故が原因だと聞いているのですが、その辺の  
説明をしてもらってよいでしょうか」

斎藤「えーとですね、まず従業員がベルトコンベアーに乗ってしまいまして、  
で、こう、わーっとなりまして、で、このような事態になったと」

木村「わーっというのはどういう事でしょうか？」

斎藤「なんか、こうあったんですね、それがこう、わーっということです。  
本当、しゃーしゃーせんつした！！」

将人「すいませんでしたっていう普通の謝罪はできないのでしょうか？」

斎藤「そうですね、えーと本当にすいませんでした、しゃーしゃーせん」

堀内「しゃー……」

熊谷が入ってきて。

熊谷「マスコミのみなさますいません、社長はこの後、ゴルフコンペに  
いかなければいけないので、会見はここで終了いたします」

堀内「人が2人亡くなってるんですね？」

熊谷「たしかに、2人亡くなっております。でも労働者ですから。そういう事も  
あります」

高山「今の発言は階級差別では？」

熊谷「差別ではありません、区別です」

木村「亡くなった方の片方は従業員じゃなかったと聞いていますが」

熊谷「従業員の奥様です。同じことです。従業員の配偶者は労働者です。」

将人「マネージャーじゃなくて、社長はどう思っているんですか」

斎藤「ですから、何度も言っていますが、ほんまもうしわけなしやつ！！」

熊谷「それでは、皆様、すいません。社長は時間がありませんので」

高山「ちょっと待ってください」

斎藤と熊谷戻る。

芳賀と谷村出てきて

芳賀「それでは、続いての会見にまいります」

堀内「えー、来年から花火が全面的に禁止になるというのは本当ですか」

谷村「本当です」

高山「それはなぜでしょうか！？」

谷村「先日、この世界の夏のシンボルでもある、

夏のお嬢さんが下痢のしすぎで亡くなりました。

我々も必死になって、二代目の夏のお嬢さんを探したのですが、

ここ数年の異常気象によって、小ぶりのお嬢様しか作ることができず、

夏のお嬢さんの生産を断念いたしました」

木村「それが、花火の全面禁止となんの関係があるんでしょうか」

谷村「夏のお嬢さんは死に際に、この世界中のスイカを食べきり、

世界中のセミを殺してしまったのです。夏の風物詩がほぼ全滅したと言って

良いでしょう」

将人「もしかして、夏がなくなってしまったという事でしょうか？」

谷村「はい、今年から、夏を撤廃したいと思っております。これからは、

一年は三季、しゅんしゅうとうです」

堀内「花火だけでもどうにかならないのでしょうか」

谷村「夏がなくなったのに、花火は必要でしょうか！？それは、

バットもボールもないのに、グローブだけで野球をするようなものでは

ありませんか」

木村「では、もう私たちには、ひと夏の甘い罠も」

堀内「スイートサマードリームも」

将人「甲子園も」

高山「少年時代も」

谷村「もうないのです」

芳賀紙を広げる

「無夏」と書いてある。

斎藤が走ってきて、

斎藤「号外だー！！世界から夏がなくなったぞー！！」

みんな新聞を受け取る。

熊谷立ち上がり。

熊谷「みなさんは想像したことがあるでしょうか、夏がなくなった世界を」

堀内「もし、夏がなくなったら困ること」

前に、川尻、谷村、熊谷、将人出てきてホワイトボードとペンを持っている。(日替わり?)

あとは戻る。

大喜利を一順、もしくは二順。

堀内「夏がなくなるとはこういう事なのです！！」

木村「異議を申し立てます！！」

堀内「なんだ君は！！」

木村「私は、夏のお嬢さんになりそこねたものです」

将人「なりそこねが出てくるんじゃない！！」

熊谷「そうだ！君がなりそこねさえしなければ！夏はなくならずにすんだのだ！！」

谷村「いわば君は、妖怪、夏なくしだ！！」

木村「聞いてください！！ドリルチンコ！！」

みんな「しゅん(落ち込む)」

木村「良く、耳を澄ませてください」

足音が、ひとつ。

木村「これは、夏の足音では？」

足音が2つ。  
どんどん増える足音。  
音楽になっていく。

大喜利メンバーは足を鳴らしながら戻り。  
前にいるのは、木村、堀内、斎藤、芳賀になる。

堀内「たしかに足音は聞こえるが、これは本当に夏の足音なのか？」  
木村「足音であることは間違いないんですけど」  
斎藤「もし、その足音が極限まで近づいたときに、夏じゃなかったらどうするのだ」  
芳賀「そうだ、夏ではなく、タランチュラのでかいのだったらどうするのだ！」  
堀内「タランチュラのでかいやつのイメージをひとつ」  
斎藤「えー・・・お腹を尖った棒で指すと白い汁がたくさん出る」  
木村「ナイスイメージ！！」  
芳賀「ちょっと待て、やつらが来る。隠れるぞ」

木村堀内斎藤芳賀戻る。

川尻と高山現れる。

川尻「ええい！！今この辺に、隠れ夏シタンの気配を感じたのだが」  
高山「まさか、この時代にそんな時代錯誤な人たちがいるはずないじゃないですか？」  
川尻「それもそうだな。よし、この辺で飯にしようかと見せかけて、  
ここから取り出した箸をシュッ！！」

芳賀が転がり出てくる。

芳賀「ぐわああああ」  
川尻「掛かりおった掛かりおったわ、隠れ夏シタン。なんせ、隠れ夏シタンは  
すごくシトラスの香りがするからね、わかるからね！！」  
高山「あんたが一人いるってことは、仲間がいるってことだね」  
川尻「隠れ夏シタン一人いるところ、隠れ夏シタン2人いるという」  
芳賀「いや、ここにいるのは俺一人だ」  
川尻「なんだと、隠れ夏シタンが一人で産卵したケースなど聞いたことがないぞ」  
芳賀「産卵してないからね」

川尻「ボン、臭いはするか？」  
高山「臭いはしないみたいね」  
川尻「まあいい、ひとり見つけられただけでもめっけもの」  
芳賀「おい…おい…やめろ」  
川尻「お前の名前は今日から広瀬香美」  
芳賀「ぐっはあー、冬だあー」  
高山「これからは大人しく冬として生きていくんだね」  
芳賀「う、うわー！！」

芳賀戻る。

川尻「さて、ボン行くか」  
高山「なんか、夏の生き残りを殺していく私たちの仕事って」  
川尻「なんだ、疑問でもあるのか」  
高山「いや、なんでもないや」  
川尻「そろそろ、行くか」  
高山「な一つがすぎーかぜあざーみー♪」  
川尻「ボン、その歌は禁止されているはずだぞ？」  
高山「夏の歌だもんね」  
川尻「ああ、でも、なかなか良い歌だ」  
高山「これがもし冬の歌ならばね」

熊谷と谷村が出てきて。

熊谷「いらっしやいっせー！！」  
斎藤「いらっしやいっせー！！」  
川尻「おお、ちょうどよい、君たち、この馬のお尻にガソリンをタブタブに入れて  
くれたまえ」  
熊谷「かしこまりましたあー！！会員証はお持ちで？(受け取って)はい、確かに」  
斎藤「馬の腹のあたりはお拭きしましょうか？」  
高山「お願いします」

斎藤、馬の腹のあたりを拭く、熊谷はガソリンを馬のお尻に入れる。

熊谷「お客様、ただいま、キャンペーン中のございまして、  
今月誕生日のお客様は半額ということに…(会員証を見て)

8月生まれなんですね・・・」

川尻「いかにも」

熊谷「娘と一緒にだ」

川尻「娘さんと」

熊谷「生きていれば、ですがね」

高山「お亡くなりになったんですか？」

熊谷「まあ、まだ夏があった頃ですわ、8月に生まれたんでね。

夏と名付けたんですわ。でもね、夏が全面禁止になった際の、

処分の対象になってしまったんですわ。まあ、運が悪かったちゅうんですかね。

親としては、長生きして欲しかったですけど・・・。

ま、その季節が無くなってもね、やっぱり僕の中では、8月は夏ですわ」

斎藤「滅多な事言うもんでない！！夏撲滅委員会に見つかったら大変だべ。

最近この辺を2人組がウロウロしてるって聞くべ」

熊谷「あ、そうか」

高山「運が悪かったね、実は僕たち」

川尻「ボン！！黙れえい！！」

熊谷「お客様？」

川尻「いいや、なんでもない。ご店員、わしらは、夏滅のものではないが、

軽々しくそのような事を、口にするのはやめておいたほうがいいな」

熊谷「へえ、すいません(会員証を返す)」

川尻「しかし、今は夏ではないが、もう夏などこの世界のどこにもないが、

心に持つぐらいは許されるだろう。行くぞ、ボン」

高山「へい」

川尻「あれ、進まぬぞ」

斎藤「すいませんお客様、馬が死んでおります」

川尻「え？馬死んでんの？」

斎藤「多分、お尻にガソリンをいれたからだと」

川尻「ええ！！馬ガソリンダメなの！？」

谷村と芳賀が逆サイドに出てきて。

川尻、高山、熊谷、斎藤戻る。

芳賀「元気でな」

谷村「うん」

芳賀「親戚の人に優しくしてもらえるといいな」

谷村「あ、うん、そうだね」



芳賀「これやるよ」

谷村「これ、タイガークエストのレアカセットじゃん」

芳賀「俺、お前がいないと多分ゲームやんねーからさあ、あ、電車来た」

SE 電車通過音

芳賀「快速か…まあ、だからもらってくれよそれ」

谷村「俺もお前がいないと」

芳賀「いいから持ってけよ」

谷村「俺さ、岡田もお母さんも大好きでさあ」

芳賀「お前オヤジのこと岡田って呼んでたのか」

谷村「岡田とお母さんは夏が好きでさ」

芳賀「うん」

谷村「この季節になるとウザイぐらいテンションが高かったんだけど」

芳賀と入れ替わりで、木村。

ME 思い出みたいなやつ

木村「どう？たかし、お母さん水着買ってみただけど」

谷村「どうでもいいよ」

木村「なによ、たかし、こう見えてもお母さんね、昔は渚のハイカラ人形って  
呼ばれてたのよ？」

谷村「あっそ」

木村「ほら、たかしの分も水着買ったから。来週はみんなでプールいきましょう！！  
ねえ、岡田！！」

将人出てくる。

将人「そうだな、来週はみんなでプールだ！！」

谷村「2人で行っておいでよ、夫婦水いらずでさ」

将人「ばかやろう！！プールだから水いらずのはずないだろ！！」

木村「まあ、岡田ったら」

将人「岡田はな、俄然やる気だぞ！！流れるプール用の訓練だっているのさ。  
工場にな、ベルトコンベアーがあるんだ。あれはもうほとんど  
流れるプールだからな。こう、横になって、浮いている感じになってみるのさ」

木村「お母さんは岡田のそういうアグレッシブなところに惚れたのよ」

将人「たかし、いいか、プールで流れていこう、景色も流れていこう。

ずっとずっと流れるだろう。時間も流れていこう。

そうすると、昼に浮いていた俺が、夜に浮いている俺になるだろう。

そうすると、花火がパーンって、あっちでもこっちでもパーンって。

なあ、母さん」

木村「流れるプールの流れで、いろいろあってお前が生まれたんだからね」

将人「だからな、お前が外に出られるようになったら、みんなでプール行って、  
花火だぞ」

谷村「プール行って、花火か。プール行って……」

木村と将人戻る。

谷村「俺さあ、外出たんだけど、外出たんだけどさあ、もう、

この世界に夏はないんだって、蝉も鳴かないしさ、ほんの少しの間に  
好きなものが全部無くなっちゃったよ」

小さく鳴くセミの音。

谷村、反応する。堀内が出てきて、閉じた手のひらを開く。

そして飛ばす。

谷村「すいません、それ」

堀内「あ、これ？」

谷村「はい」

堀内「なんかねえ、手のひらから蝉が生まれるんだ」

谷村「ええ！！」

堀内「へえ、君か」

谷村「何がですか？」

堀内「夏のお嬢さんと、セミの殺し屋の忘れ形見がいると聞いてね。

君に会いに来た」

谷村「なんですか、それ」

堀内「夏がなくなったのはね、君のお父さんとお母さんのせいなんだ」

谷村「？」

堀内「君のお父さんとお母さんが、夏だったんだ。いや、夏になるはずだったんだ」

谷村「あの、誰なんですか？」

堀内「僕は、インポテンツ松尾、君のお父さん、いや、岡田の家系とはね、  
3代に渡って、仲がいいんだけどね、祖父も、そしてオヤジも、

君のお父さんの死に目に立ち会っていたそうさ。  
僕は3代目にして、そのまるで呪いのような目には合わなかったんだけどね、  
君のお父さんが馬鹿な死に方をしたからね。  
せっかく運命のような死をまぬがれたっていうのにな」

芳賀が走ってきて  
ME:夏のお嬢さん

芳賀「夏のお嬢さんが来たぞー！！」

熊谷、高山、斎藤、将人出てきて配置へ。

熊谷高山斎藤「ええ？郁恵ちゃんが！？」  
芳賀「郁恵ちゃんじゃない！！夏のお嬢さんだ！！」

SE ボカーン  
みんな吹っ飛ぶ。

みんな「うわあ何か爆発した」

木村出てくる。

木村「こんにちは、夏のお嬢さんこと、榊原郁恵です！」  
堀内「郁恵ちゃんじゃないか！！」  
木村「さあ、夏の男子たち、懺悔をしな！夏に懺悔がないなんて言わせないよ！！」  
堀内「今年のお嬢さんはサイズが小さいな」  
将人「やっと会えたな3代目！！(手のひらを見せて)見ろ！俺はすでに  
3万匹を超えるセミを殺したぞ！！お前をおびき出すためにな！！」  
木村「ちくしょー！！よくもセミを、セーミーの一」

将人どこかに飛び込む。  
SE 水の音

将人「はっはっはっは、どうだ流れるプールに流られては、うまく手で挟めないだろう！！」  
木村「うう、うまあー！！」

木村も飛び込む。

SE 水の音。

熊谷「その時だった！！夏のお嬢さんというよりも」

高山「そのサイズの小ささかあら、渚のハイカラ人形と謳われた」

斎藤「夏のシンボルが」

3人「溺れた！！」

木村「あばあー！！」

将人「チャンス！！」

将人、木村を抱きかかえて飛ぶ、木村と将人と堀内以外、みんなスローで戻っていく。

堀内「今でも覚えているよ、2人はまるで、夏の花火のように上空に舞い上がった。

そして岡田と夏のお嬢さん、いや、渚のハイカラ人形は、空中でSEXをした。

それで、できたのが、君だよ。そう君は夏の結晶！！夏の希望！！

君こそが、僕らの切り札なのだよ、たかしくん！！」

SE 電車の通過音。木村と将人戻る。

堀内「たかしくん……もういねえ」

堀内、セミを手のひらから生み出して逃がす。

堀内「小さい夏を生み出すだけの力か、俺にこんな能力をさずけたのは誰なんだ」

堀内と入れ替わりで、川尻入って。魔王の位置へ。

川尻「……こないでやんの。ブッチしてやんの。

え？明日って言ってたよな？……え？もしかしてもうゲームやって

ないのかな、まあ、いつか」

川尻が話している間に。木村と芳賀と斎藤と熊谷入ってきて。

魔王の周りを周回している。川尻戻る。

熊谷「本当にこの辺にいるんですかね？」

木村「たしかにこっちから匂いがするのよ」

斎藤「臭いって」

芳賀「なあ」

木村「バカにしないでよ、こう見えても私、夏のお嬢さんのなりそこねなんだから」

芳賀「でもさあ、もう山に入って2～30分経つけど、景色変わらないぜ」

逆サイドに谷村出てきて。頭の上から何かを掴んで下に下ろす。

4人「うわあー！！なんだ！！」

4人転がる。

谷村「お前ら、誰だ、人の頭に登りおって」

熊谷「み、見つけたー！！夏男だ！！」

木村「私たちが登っていたのは、夏男の頭だったのね！」

斎藤「夏男さーん、僕たちの味方になってくれませんか？」

谷村「味方？」

芳賀「僕たち、夏を取り戻したいんです！！」

熊谷「それですねー、代々、夏のお嬢さんの執事を務めてきた夏男さんなら、  
協力してくれるかと思ひまして」

谷村「俺はもう、夏男をやめた、人間嫌い、俺動物を好む」

木村「夏男さん！！」

谷村「アレ……お前……お嬢に似てる」

木村「私は、なりそこねです。養殖物なんです。綾波レイみたいなもんなんです」

谷村「では、お前は、オリジナルじゃない、俺、お嬢、好きだった。だけど、もう、  
俺の好きだった、お嬢、いない」

斎藤「今日は夏男さんに、耳寄りな情報を持ってきたんです」

芳賀「夏のお嬢さんの忘れ形見が生きていることが分かりました」

谷村「おお」

熊谷「うわあ、冷たい！！」

木村「なんか降ってきた！！」

谷村「おお……おお……」

芳賀「泣いてる……夏男が泣いてる」

谷村「お前たち、俺に何をしたい？」

熊谷「みんなで考えたんですが、夏がなくなって、花火が禁止になりました！！

それですね。あんなにたくさんあった花火は、火薬はどこにいったのか。  
考えていたんです。調べて分かったことは、その火薬というのが」

斎藤「潰れた缶詰工場に集まってきているのです」

芳賀「夏を好きなものたちが、世界中の夏マニアが、夏を集めているのです」

谷村「もしかして、俺に、爆弾を作れといっているのか？」

木村「夏のお嬢さんが現れるとき、必ず、よくわからない爆発が起こる。

あれはあなたの仕業よね。夏男」

熊谷「山に隠れ住み、超巨大化したあなたなら、僕たちから夏を奪った、

政府を破壊するほどの爆弾を作れるはずです」

谷村「それは、お嬢の忘れ形見も望んでいることなのか」

斎藤「多分、望んでいるはずですよ！夏のお嬢さんの息子が、夏が嫌いなわけがない！！」

谷村「わかった……俺に、任せろ、手のひらに乗るが良い」

4人手のひらに乗る。

そのまま戻る。谷村もズシンズシンと歩きながら戻る。

川尻と高山入ってきて。

川尻「ボン、張っていた甲斐があったな」

高山「馬鹿な奴らね、私たちに尾行されているということも知らずに、

さ、夏滅に報告しましょう」

川尻「待て、ボン。お前はとても職務に熱心な男だ。だが、ここはどうだ。

どうなるか見守ってみるか？」

高山「旦那どういう事？」

川尻「俺は昔、夏に買っていたチワワをあれされて、夏が嫌いだった。

俺にとって夏は復讐の季節だった。あとは全部パンティーの季節だった」

高山「パンティー？」

川尻「冬は嘘だがな、冬はね」

高山「それでなんで見守るのよ」

川尻「寂しいのだ、復讐の季節がなくなり、いつの間にか俺は夏に復讐をしている。

俺は、復讐に復讐をしているのだ」

高山「中卒のボンにはわかりんせん」

川尻「まあいい、俺は少し見守ってみようと思う。世界と、夏を愛するバカ者たちの

大戦争を」

高山「まあ、旦那がそういうなら、ボンはそれに乗っかりますがね」

NA「その頃、地球の片隅では、変な祭りがおこなわれていた」

みんな出てきて、腕をブンブンしている。そこに、熊谷が通りかかる。

熊谷「うわ、なんかやってる。すいません、これ何してるんですか？」

堀内「腕、ブンブン祭りです」

熊谷「なんの意味があるんですか？」

堀内「こうやって腕をブンブンするじゃないですか」

熊谷「はい」

堀内「その祭りです」

熊谷「え？」

芳賀「腕をブンブンすると、この辺で風が起こるんです」

熊谷「はい」

将人と斎藤、腕をぶつけ合い始める。

熊谷「あっちでなんか始まって」

将人「腕ブンブン相撲です」

熊谷「なんなんですかそれは」

斎藤「腕をブンブンして、相撲をするんです」

熊谷「なんでそんな事をするんですか」

堀内「それではあなたにお聞きますが、あなたは自分が二本の足で

歩くことに疑問を感じているのでしょうか？いや、そんなやつはいない。

あなたは今、私達に、それと同じようなことを聞いているのです。

腕は、ブンブンするものなのです！」

熊谷「そうなんですか？」

堀内「これは冗談ではありません、腕はブンブンするものなのです。

今、世界中のほとんどの人間が、腕をブンブンしていませんが、

それは自然の摂理に逆らった行動なのです。みなさん、

腕をブンブンしましょう」

みんな「皆さん、腕をブンブンしましょう！！」

熊谷「……………」

熊谷、腕をブンブンしはじめる。

みんな、熊谷をみてうなづく。

ME

手からセミを生み出し続ける堀内を残して、みんな戻る。

SE セミの音

堀内「だいぶん、森にセミが戻ってきた。ここだけはなんとか夏だ」

将人が入ってきてセミを殺している。

堀内「ええ！？そんな……まさか」

セミを殺す将人

堀内「こら、やめないか！！」

すごい力で抵抗する将人。

止めている間に、高山も手をたたきながら入ってくる。

堀内「ええ！？増えた！！」

芳賀も手をたたきながら入ってくる。

堀内「どんどん増える！！やめろー！！お前ら！！」

みんなやめて、堀内を見る。

堀内「お前……岡田じゃないのか……死んだはずの岡田……」

将人「わたしおかたちかうよ、おかたさんはしてるけどね」

高山「おかたさんはぼくらにせみのころしかたおしえてくれた」

芳賀「せみころすのたのしね、でもさいきんせみいなかたね」

将人「たいくつしてたとこ、せみのなきごえきこえたね」

高山「だからころすだよ」

堀内「せっかく増やしたんだから殺さないでくれ」

将人「せみふやす、ふやせるの？」

堀内「ああ、なぜだか俺はセミを増やせるのさ」

堀内、手のひらからセミを出す。

3人「おおー」



将人「おまえもしかして、いんぼてんつ松尾か？」

堀内「なぜ俺の名前を知ってる？」

将人「やっぱりそだ」

3人ひそひそ話す。

将人「おかたさんからでんごんあずかてるよ」

堀内「岡田から伝言を！？聞かせてくれ！！」

高山、芳賀戻る。

将人「松尾、お前がこのメッセージを聞いているんだとしたら、俺はもう、

ベルトコンベアーに乗ったまま裁断機に飲み込まれて死んでいるはずだ」

堀内「死に方まで知っていたのか」

将人「お前の親父と、俺のオヤジは仲がよかった。仲が良すぎて、

一時期毎晩のようにセックスをしていたらしい」

堀内「え？まじで？それ超引くんですけど」

将人「その時にできたのが、俺とお前だ」

堀内「え？ええー！！」

将人「俺とお前は兄弟なのだ。俺がセミを殺し、お前がセミを産む。

陰と陽がお前と俺という存在なのだ。俺の知っているお前は、

まだセミを生み出せてはいなかったが、今、この俺にそっくりな男、

ビンテージジーンズ履き男の伝言を聞いているという事は、

お前が生み出したセミが、こいつをおびき寄せたんだと信じている。

夏を救ってくれ、松尾。俺の息子に夏を返してやってくれ松尾」

堀内「ああ、そうか、俺の手は夏を取り返す手なのか……」

将人「て、いてたよ」

堀内「ここに来て俺がキーマンになるなんて、割に合うのか、何か手当は付くのか」

将人「あと、「今日の晩御飯は、寿司」て、いてたよ」

堀内「どうでもいい！」

たくさんの銃声。かわしながら戻る将人、堀内。

逃げてくる谷村。ボックスに隠れる。

谷村「な、なんなんだ一体！！」

芳賀と斎藤出てきて。

芳賀「逃げるんだたかし君」

谷村「なんですか？」

斎藤「君は、夏の忘れ物、夏の宿題、ひと夏の思い出」

芳賀「政府が君の存在に気づいたようだ」

谷村「あなたたち誰なんですか」

芳賀「俺は、夏を愛する男。そして双子の兄を殺された男」

斎藤「俺も、夏を愛する男、君の味方だよ」

谷村「助けてください」

芳賀「もちろんだ。夏を取り戻すためのこの戦争」

斎藤「我々が勝つには君を守りきることだ」

2人「ここは我々に任せて君は逃げろ！！」

谷村「でも、どこに逃げれば」

熊谷出てきて。

熊谷「僕についてきてくれ」

谷村「あなたは？」

熊谷「僕は、夏シタナーの俊足。甘納豆食べ助。君を夏男のところまで  
連れていく」

谷村「夏男？」

熊谷「さあ、こっちにくるんだ！！」

斎藤「任せたぞ！甘納豆食べ助」

銃声

芳賀「さあて、父親がプロのセミ殺し屋世界記録ホルダーだった  
俺の実力。見せてやるぜ！！」

斎藤「俺だって父親はなあ！！公務員だあー！！」

2人「わああああ！！」

上手に飛びかかるようにはける。

SE 銃声

2人入ってきて倒れる。

2人「逃げろー！！」

ME

高山「逃げる逃げるたかしと甘納豆食べ助！！」

堀内、地図を広げ、それを指さす将人

将人「逃走経路は、大体ここからこのへん！！」

同時にみんな箱を階段状に並べていき、割り箸の先に付けられた、谷村と、熊谷の人形を動かしながら。

芳賀「行くも地獄」

斎藤「戻るも地獄」

木村「夏をなくした世界 VS」

高山「夏を愛するバカ者たちの追いかっこ」

川尻「時には陸を、時には少しばかり水っぱいところを駆け抜けて」

堀内「目指すは夏男が爆弾を作っている缶詰工場」

将人「夏男は待っている、夏の希望が見えるのを」

熊谷「夏男は、夏男は一！！」

並べた箱の前に谷村と木村現れる。

谷村「お嬢」

木村「私はお嬢じゃないわ、お嬢のなりそこね」

谷村「お嬢と呼ばせてくれ、俺はお嬢が居なければ成り立たぬ存在」

木村「夏男」

谷村「さあ、出来たぞ、希望の品だ。これが世界を吹き飛ばす爆弾だ」

木村「それが、超巨大爆弾なのね」

谷村「俺にとっては巨大ではないが」

谷村、木村に爆弾を渡す、超巨大。

木村「私にとっては巨大だわ」

谷村、もう一度爆弾を受け取って。

谷村「あとは夏が来るのを待つだけだ」

木村「夏が」

谷村「これに火を点けれるのは、夏への胸を焦がすような思いだけなのだ」

谷村、木村箱の後ろへ。

上記のやりとりの間に、箱は一直線に並べられている。

まだ、人形は箱の上を走り続ける。

熊谷「待ってくれーたかしくん、まさか、夏シタナーの俊足の俺が

こんなに離されるとは大誤算！！たかし君無茶苦茶足早いじゃないか」

谷村の人形、少し待って。

熊谷「あ、待ってくれた。たかし君。僕は君に謝らなければいけない」

谷村「何をですか？」

熊谷「多くは語れないが、僕は、君のお母さんを助けることが出来たかもしれないのだ」

谷村「どういう事です？」

熊谷「僕はあの時、突っ込むことに夢中で…いいやそれは言いわけだ。

事は大きくなってからでなければ気づけないものなんだろう。

だから僕は気づいてしまった。夏がなくなってからでは遅いというのにね」

2人、台の上に登る。

谷村「いいんですよ、もう」

熊谷「え？」

谷村「夏は過ぎていくもの、他の季節に夏のことを懺悔してもしょうがないんです。

夏の懺悔は夏にするべきなんです。そして、夏の懺悔が無い男なんていないんです」

MEOUT

銃声

熊谷「くそ、あの2人、瞬殺されやがったな、ダメだ、前にも後ろにも、

違う季節が迫ってる。これが世界を相手にするということなのか、

たかしくん、僕が囧になる。君は、行くんだ。とお！！」

熊谷、箱から飛び降りる。

谷村「わあー、一瞬でズタズタになった……駄目だ、やっぱり僕は引きこもりだ。引きこもりで、反抗期の、ただのガキだ。岡田も、お母さんもいなくなって、友達も居なくなって……蝉も泣かなくなってさ……」

将人が台に登る。

ME

将人「たかし、夏はいいなあ」

谷村「岡田！？」

将人「夏は、すげえぞ。夏のヤリマンの回転率はすごいぞ。

週七の終日でセックスだぞ。ヤンキーだってはしゃいじゃうぞ。

ガリ勉ボーイの勝負時でもある。高校球児のどや顔だって拝める。

プールや海に行って、可愛い女がガッチリタトゥーを入れてて

引いちゃうことだってある。浴衣の女は着込んでいるのになんでエロいんだろうな。

たかし、夏は生命力が半端ない。精子の出が違う。濃いのが出る。

そんな夏がよ、他の季節に負けるわけないだろ。なあ、たかし。

夏のお前は、無敵だ」

谷村「岡田……」

将人「っいてたよ」

谷村「誰！？」

将人「つたえたよ」

将人、手をたたく。手を見せる。

谷村「あ、蝉」

将人台降りる。

堀内が前に出てくる。

堀内「2万3254……2万3255……」

堀内、生み出している。

堀内「夏のセミを殺した世界記録は何匹だったっけ？それと同じ数だけ生み出せば、  
少しでも夏は戻るかな……2万3262」

SE セミの音

川尻、高山、前に出てきて

川尻「なあ、ボンこの音はなんだ？まるで真夏のセミの声」

高山「旦那、まさか夏でもあるまいし、セミの音なんか……あれは」

川尻「面白いなボン、また世界が変わろうとしているぞ」

高山「セミの大群！！」

堀内「3万！！さあ、飛ぶんだたかしくん！！君はお母さんが好きだろう、

岡田が好きだろう！夏に宿題をほっぽって友達とやるゲームが好きだろう！！

夏に飛び乗れたたかしくん！！夏に飛び乗って、ほかの季節を飛び越えろ！！」

木村「空中で受精したお前だ！」

将人「空中で性を受けたお前だ！」

斎藤「ちんこ！」

高山「おっぱい！！」

谷村「う、う……うおおおおおおお！！」

谷村飛ぶ。

熊谷「無理やりいった！！」

箱が動き回る。→これは付けます。その間から、人形のたかしと、その下に、

セミの大群。

後ろに台が並び。

谷村と木村

木村「夏が飛んでる！！」

谷村「持って行け、夏の忘れ物！！」

谷村爆弾を投げる。

人形のところに飛んでいく爆弾のミニ書割り。

木村「これで、これで他の季節を、世界をふきとばすのね」

谷村「お嬢、それは違う、俺は夏に戦争はしない。何故なら、夏が好きだからだ」

木村「じゃああれは・・・」

谷村「もう一度、夏が来たら言おうとっていたのだ。お嬢、俺はお前を愛している」

谷村、木村を手に乗せて、その木村とキスをする。

堀内「夏、地上に出たセミは、一週間で死ぬ。死ぬまでずーっと泣き続ける。

人間でいうならば、死ぬまで、生まれた瞬間の、最大出力の状態をキープしているようなもんなのだ。その3万の大群は、575年分の生命力をもって、たかしくんをこの国で一番高い山へと運び」

富士山の書割りに入っていく、たかし。

芳賀「一瞬でやられた我々が」

斎藤「目を覚ましたときにはもう、そこに夏があった！！」

書割部分だけが、浮かぶ。

箱をすべて後ろに移動する。

川尻(魔王)立ち位置へ。みんなも立ち位置へ。

川尻「あっはっはっは、今度こそ4人で・・・多い！！」

熊谷「いや、なんかやっぱりみんなで行きたいっていう話になりました」

川尻「う～ん」

熊谷「夏なんで、みんなもいい思い出にしたいっていう」

川尻「じゃあ、いいや、8人まとめて相手してやろう！！かかってこい！！」

堀内「やあ！！(剣で切る)」

川尻「ぎゃあああああああ！！」

川尻死ぬ。

熊谷「よわああああああああああい！！」

芳賀と谷村、ゲームの状態へ。

芳賀「よっしゃークリアー！！」

谷村「いえーい！！」

木村「ちょっとゲームばっかりやってー！！宿題はやったの！？」

谷村「うるせえなー！！いいの！夏休みはまだあるんだから！なあ？」

芳賀「俺も宿題終わったよ」

谷村「お、おお」

将人と斎藤入ってきて、酔っ払ってる。

将人「おう、たかし、ゲームか」

谷村「岡田、昼から酒飲んでんじゃねえよ」

将人「ばかやろう、お盆だ、大人にだって夏休みだ。なあ社長」

斎藤「しゃーっす、しゃーしゃーっす」

芳賀「あいつ社長かよ！！」

谷村を残して、みんな準備。

谷村「僕は、セミの大群、というか、夏の塊にのりながら思い出していたんです。

あの夏の日。あの夏の日、というのはノスタルジックの最高峰にある  
言葉なんじゃないかと個人的に思うんです。僕は、あの夏を取り戻すためなら、  
なんでもできると思った。だからね。お母さんが、岡田にお弁当を  
届けに行ったように、僕も夏のために散っていった者たちに、  
夏を届けにいこうと思ったんです。爆弾を抱えたまま、その大きな山の  
火口に僕は飛び込みました。うわああああああああああ！！」

ME

照明谷村にしぼる。

まわりで、花火の音に合わせて、後ろの箱に座った面々が、  
サイリウムをつけては回転させて投げる。大量のサイリウムが  
飛び交う。谷村はそれを目で追いかけていく。

谷村「そうか、これは、花火か、花火だったんだ。流れ流れて、  
花火。僕は、死んで。身体が溶けながら、溶岩に流れながら、  
それを見たのでした」



谷村と入れ替わりで、川尻と高山。

川尻「ボン、夏が来たようだな」

高山「どうやらそのようですね」

川尻「夏がきたからには、俺は復讐をせねばならん」

高山「旦那、見せてくださいな、あなたの夏の復讐劇」

みんな出てきて、後ろ向きに並ぶ。

川尻「はい紙芝居だよー！！」

斎藤「おじさん、紙芝居って何ー！？」

川尻「(無視)はい、はじめるよー」

将人「今日はどんな話をするのー？」

川尻「(無視)むかしむかし、季節は夏、こんなふうにも、セミを殺し続ける、  
男がいました」

音楽、上がっていく。

紙芝居は続いている。子供たちは笑っている。暗転。

おしまい。